

無双直伝英信流正統宗家 河野稔天劍百鍊先生

伝承会報

第七号 平成二十六年四月一日発行

編集発行 鈴木伸昌

河野先生は昭和三十八年に山形県村山市楯岡にある林崎居合神社の境内に石碑を建立されております。その際に石碑建立工事を依頼されたのが地元の安達石匠です。安達石匠は依頼された石碑が余りにも大きかったため、建立にあたり知り合いの工藤大工に相談を為されたうえで建立工事を行ったとの話が伝わっております。

さて、居合神社は林崎甚助重信公を祀った神社ではありますが、そもそもは熊野神社であり、奥の宮の存在が伝承されてはいましたが、場所の特定はなされておりませんでした。いわゆる伝説というものであります。

河野先生は、その場所の特定について安達石匠と工藤大工に調査の依頼をされました。その結果、場所の特定がなされ、昭和四一年には奥の宮に御神号霊石を奉安する運びとなり、河野先生もその地細野を訪れました。

そのそもその奥の宮の場所特定の経緯について、細野にお住いの

鈴木宮司に取材を試みましたので、以下、インタビューの模様を採録いたします。

鈴木「前に、ところどころお話お伺いしてましたけれども、まとまったお話を伺ったことがなかったんで、いちどお伺いしておきたいと思ひまして。収穫祭でいただいた資料をみますと、河野先生が、熊野神社の奥の院はどこかとお尋ねになられて、それで宮司様とか田中様とか三名が色々、探されたと言う事で。」

宮司「田中咲次郎さん。この鈴木というのがうちの爺さん。五十嵐吉雄さんというのがもう一人いたんだけど、この三人が要するに、三十代後半の頃から友達で酒のみ仲間だったのよ。そんな中で、夢物語というか、そもそもはこの三人が、釜ヶ沢に行く途中もそうだけど、二ヶ所ほど湯花が出るところがあるんですよ。湯花、湯の花。温泉のね。それを見つけて、温泉掘ろうと、それで山形大学とか東北大学から地質学の先生頼んできて、山を巡ったわけですよ。いろいろと。何年も何年も。しかも山仕事好きなんだから、山の仕事しながら。ということ、そうやってるうちに、皆さんも行ったあそこ奥の院の場所を、三人がたどり着いてたわけ。ただ、そこは奥の院だというのがわかってなかった。そんな時に、宗家から、河野先生の方から、奥の院、修行した場所が確か、東の方にあるんだという話が、といわれて、今度村山の石屋をしている安達さんとか、大工の工藤さんとか、じゃあどこだろう、じゃあ探そうと、東の方ということ、地理的にはこっちの方だよという風に向こうは向こうでやってるときに、たまたまこっちの三人と偶然会ったわ

けですよ。」

鈴木「あれですね、河野先生が、安達さんとか工藤さんにお話しをして、安達さんや工藤さんが探そうかといってる時に、こちらの田中咲次郎さんなんかとたまたま会った。ああ、それなら知ってるよ、」

宮司「それで、確かこういう場所があるはずだと、じゃああそこでないのかなと行ったんですよ。ね。で行ってみたら洞穴があって、脇の後ろの方には座禅岩があって、前はあそこ滝が流れてたんですよ。」

鈴木「見つけた当時ですか」

宮司「いや、修行した当時、説で。では滝もあったんだろうよ、いうところから、間違いないんじゃないかと、その穴の中へ入って行ってみたんですよ。あの細いところへ。そしたらやっぱり、そこから短剣とか古銭とか、それから、なんかろうそくみたいな、たき火をした後とかってのがあそこにあったというのでほぼ間違いないだろうという確信を持って、報告をしたわけ。で河野先生はじゃ奥の院へ行こうと言う事で、何名か、三十名か何名かいたんでないの。で奥の院へいくよと。で、ただ行ったんでは駄目だからということで、九州の方に弟の勇さんという方をお願いして、九州のどこっていったかな、石を送らせて、それで自分が釜ヶ沢大明神奥の院と書いたのを安達さんが石に彫ったわけですよ。こないだ中入って行ってみたでしょ。あの石。あれ大体三十キロあるやつを、当時、細野の中でも体格が良くてまだ若い衆で力のあった、ヤマス(山師)長男の五十嵐茂征さんて方が、もう亡くなったんだけど、その方が、俺らより五つ

か六つ先輩、彼が「じゃ俺が」と背負って登った。昭和四十一年八月二十一日釜ヶ沢大明神の石で三十キロを負って登ったよという。」

鈴木「ヤマス長男とは？」

宮司「ヤマスさんという屋号。結婚して子供一人生まれてから、お正月、この辺出稼ぎ行ってたから。出稼ぎに行くときに、正月帰ってきて、お米やら味噌やら漬物やら背負って車で行く途中郡山で大型トラックと、事故で(亡くなった)。

本当にもう、俺は忘れられない、凄いなあと。で、当時私が高校卒業して、その出羽三山に修行の身だったから、四十一年。」

鈴木「羽黒山とおっしゃいましたっけ？」

宮司「はい。それで、河野先生が来られるよという連絡貰ったら、神社の方から、じゃお前行って来いと、お祭りして、御奉仕してきなさいって言われて、私羽黒山から帰ってきたのよ。だからわかってるわけ。一緒に行ったから。で俺も、白衣着て装束持って登って。一緒の人は刀しよってあそこ、登って行ったんですよ。いやひどいとこだなと思ったもん、俺だって。」

鈴木「当時は下からですかね。」

宮司「そう。だから俺、まだその時神主の正式な資格まだ貰ってないから、袴白ですよ。忘れられないですよ。」

佐藤「今よりひどかったですよね。」

結城「今、仮にも石段附けていた দিয়ে」

宮司「だから、これはちょっと忘れられないな。俺なんか必死に上ったのに、彼は三十キロ背負って行ったんだから。すごいなと思ったもの。であそこに着いてから、全部下して、中に納めて

貰ってから、私たちでお祭り、ご奉仕させてもらったんですよ。その時にやっぱり、河野百錬先生と初めてお会いして、その時はよ、私覚えあんののは、一緒についてきたのでは、谷島先生とか、中垣先生とか、一緒に来たんですよ。河野勇さんも来たんじゃないかな。」

鈴木「河野先生の弟さんですね。」

宮司「ええ、あの石、あれ。で、当時ね、名刺なんかもったりしてゐるであつたんだけど、もうわかんない、どこに行つたか。だつてそれ終つてすぐ、羽黒山に帰りましたんで。」

鈴木「ああ、修行の方に」

宮司「はい。でこれが終わつて帰つて行つてすぐ、今度は山伏の方に入つて、八月三十一日に行が終つて山伏の資格を貰つて、このあれがそうです。「四十一年八月三十一日付の神主」の免状。「悠々と雲の如し」と(いう書を)河野先生からその時、おやじが書いてもらった。それと十九代の福井先生から書いてもらった。福井虎雄先生は、「二十一代襲名したよ。」つて来たときしか会つてない。福井虎雄先生に二十一代の襲名の祝詞を上げさせてもらった、いつだったか。」

鈴木「確か五十年の八月頃ですかね。河野先生の亡くなられた後です。」

佐藤「宮司様の家は代々宮司様なんですか。」

宮司「うちは大分古いです。もう千年以上続いています。だから、百人は超えてるんだけど、もうあんまりわからない。で、二十一代の後、来る人がいなくなつたっていうか。河野先生亡くなつてから、ちよつと途絶えたんですよ。」

鈴木「福井さんの息子さんが、二十三代になられましたけど、ここに

はまだ」

宮司「来てないです。だからわからない。」

鈴木「お父さんが来られたことは知ってると思うんですけどね。」

宮司「(福井二十一代襲名祝詞をずっと探してくださっていたが)ちよつとわかんないなあ。」

鈴木「すいません、探してくれて有難うございました。」

河野先生は、「熊野神社の奥の宮はどこかと尋ねられた」ということで、資料に書いてあつたんですけど、結局熊野神社に居合神社が、合祀というんですか、一緒になつてゐるわけですよ。」

宮司「はい、最初はね、だからあそこ、林崎は熊野神社の例大祭があつたわけです。」

村山が市を上げて、丁度ここ背あぶり峠越えたとこの、たも山つてとこの大蔵の子供たち、全員居合やるでしょ。授業で居合を取り入れたわけですよ。」

鈴木「村山市大蔵」

宮司「はい。」

鈴木「奥の宮っていうのは、歴史的に言うと、熊野神社の奥の宮ということになるんですか。」

宮司「はい。だから、なんでそこが大明神つていわれたかっていうと、あそこにもそもそ熊野神社があつたわけ。この村の人たちの氏神様として、祭られていたのを昔は山仕事をやってたもんだから、こつちの今の道路でなくて山をこう歩いたわけですよ。だから山の方に来ると、下屋敷とか、鳥越沢とかつてなつて御所山までいったっていうか。山歩いたから、向こうが山内だったわけですよ。で、村山の林崎の人があそこに来てご神体を持って

いったわけよ。あそこから。「釜ヶ沢大明神」の穴に祭られていた、熊野神社を、神様を持って行ったわけ。林崎へ。」

鈴木「それは、四一年に発見された後にですか？」

宮司「そのずっと前に。だから重信公がまだ民治丸が生まれる前に。要するに、そもそものはあそこに熊野さんの本家本元があったのを林崎で祭ったわけ。あそこに。それでその熊野さんの分霊をその柳橋善兵衛さんにもあるんですよ。そこに熊野から持ってきたのが。ところが神様いなくなっちゃったから。」

鈴木「ああ、釜ヶ沢大明神に。」

宮司「だから、(熊野神社でなく)大明神大明神としかよべなくなっちゃったわけ。釜ヶ沢という地名の大明神だと。だから熊野大明神ではないわけだ。熊野がないんだもの。それで、物語の始まりは、民治丸というのがお父さんの敵、あそこで生まれて育つて、で、修行の途中で夢枕に出てきたのが熊野神社だったわけ。それでお前親の仇を打つならおれのところへ来いと、で朝起きて母親に話して、その夢の通りに行ったらあそこにたどり着いたというわけ。」

鈴木「そこは今の居合神社でなくて、奥の院だったということですか」

宮司「はい、奥の院のあそこにこもったんですよ。」

鈴木「その頃はまだ熊野神社はあそこにあったんですか」

宮司「いや、だからもう林崎にもってって、林崎でお祭りしてたわけよ。民治丸の頃は。」

だからそこで結局そこは寝泊まりしてて、夢枕にその熊野さんが出てきて、父の仇をうつんだったら、俺のところに来いと。俺のところにこいというのが、その奥の院だったわけよ。夢の中に、

こういう風に山越えて谷超えてこうだよって全部夢の中に出てきたとおりに歩いてあそこにたどり着いたっていう話ですわ。」

鈴木「林崎で修行してたら夢枕に立ったんで、その夢枕の導きに從って山奥に上って奥の院で座禅したりしたということなんですね。その時にはもうご神体はなかったと。」

宮司「なかった。」

鈴木「じゃだいたい前に。」

宮司「そう、だから五百年とか以上前でないの。よくわかんないけど。そのへん歴史。だからそういう前のいわれがあつて、あそこで籠って、結局なんか狐が道案内してあそこまで連れてったっていう説があるんですよ。白狐しろい狐が。あそこで修行やってる時に、なんか五年くらいたつてからいきなり、白髪の頭の老人が表れて夢想流を編み出させたという。夢の中で出てきたから夢想流、しかも林崎だから、林崎。そこからそういう話があつて、だから、村山でやってるんだけど今度こつちがそういうのあるんだよってなつたもんだから、向こうで今度「いやいやいや」つというので、一生懸命力を入れて、剣士の方あそこまではみんな来るわけ。どうもこつちは行政が一生懸命じゃないし、なかなかね、そんなに力ないもんだから、せめて、一年に一回秋の芋煮会の時に合わせて来て貰うようにしたらなあってことで、百鍊先生を偲ぶ会っていうふうになつてから続いている。前は八月二十一日にやってたんですよ。二十日の日に河野先生が村山に来て、二十一日にこちらに来たからその目を縁日にしようって決めたんですよ。」

鈴木「これが当時の山形新聞ですね。翌々日の新聞に載ったんですけど

どね。」

宮司「おお、なるほど。これはだから田中さんとこに来てからだよ。」

鈴木「あ、この写真の場所は田中さんのところですか。」

宮司「そうです。そうです。」

鈴木「山の登り口の下の方に鳥居ありますよね。」

宮司「ああ、山の神。あそこはね、右の鳥居が山の神。左の方が、釜ヶ沢大明神、(山の上まで行くのは)遠いから、村の人がこっちへ祀ろうっていつて祀った。」

鈴木「では、それは割と新しいのですか。昭和四十一年の後につくられたんですか」

宮司「いやいや、その前からあったの。あそこに。鳥居が二つあったの。山仕事してる人は山の神の方をお参りするけど、熊野さんの方はしなかったわけよ。だから、一緒に鳥居があった。鳥居の後は残ってるっちゃ。それで、それじゃちよつとかわいそうだねって、それこそ工藤さんが木であるそこに立てた。」

鈴木「昭和四十一年には下の釜が沢大明神の鳥居はなかった？」

宮司「なかった。」

鈴木「では、河野先生がお元気なうちにあの鳥居はたったんですか。」

宮司「たった。」

鈴木「それであの河野先生が手植えの植樹をされたんですね。」

宮司「そうそう。奥まで行くのは大変だから、この人も下で奉納してもいいんじゃないかということだね。だから私も実際白衣来て、装束付けてお祭りしたっていうのは、この時だけ(昭和四十一年)、奥は。あとは全部下で。」

もうね、考えてみると昭和四十一年の八月二十一日にあそこま

で一緒に行つて、というのは、俺一人じゃないかな。もうみんな亡くなっちゃったから。柳橋善兵衛さんなんか、あとで山持つてるもんだから、なんとかしなきゃってなって、こう協力してくれるようになった。なかなかみんなから理解して貰えなかったってことが、すごく私も残念だなあ。本当は日本一社の奥の院だから、もう、ね、いくらでも観光資源になるんだよって俺は言つて来たんだけど。議員しながらやってきたんだけど、全然もう誰も乗ってこないし、俺だけが馬鹿なつてもね・・・そういうことがあります。」

鈴木「村山の方はもう、振武館もあつて、行事もやってますし。」

宮司「だから振武館も結局宮司さんの方では持つていけないって言つたら、村山市で買って、今、だから、借りるにも村山市の方に申請して：市のものになつてるから。」

佐藤「あの鳥居も四十年は経つわけですよ。」

宮司「そうですね。(今は雪で壊れてない。)だから、ここの村の人たちも最初は田中さんと五十嵐さんとうちのじいさんと三人だけでやって、村に話しかけたら、皆さん快く「じゃやろう」ではなくて、やつぱり、一人一人口説いて、あそこら個人の山結構あるもんだから、そこに協力を求めて、じゃあ、講中を作ろうかと、お祀りするなら、ね、幟旗から幕から全部用意して、やったのよ。けども結局色んなことがあつて。ま、田中さんのとこに、その旗とか幕、あるんじゃないのかなあ。全部田中さんが、うちの神社だと言ひ出したもんだから。」

鈴木「あの山は田中さんの持ち山ですか。」

宮司「持ち山じゃないんだけど、あそこそもそも神社あつたら、神

社境内と言ったらぬけてはいたんだけど、あの辺の山がまわりが田中咲次郎の山だったわけ。」

鈴木「ああ、山があっても大明神があったら、そこだけはその人のものじゃないんですね。」

宮司「はい。神社のそこは社境内というのがあって、境内地は個人のものにはならないんですよ。だからあそここの大明神があるところは、あそこの一角はちゃんと分筆して。その周りは個人物。」

だから、あそこまで行くまでは、勝手に私ら、道路作ったりしてるけど、他人の土地をやってる。」

鈴木「山って境とかあるのですか」

宮司「あります。今もこっち側の東側の山測量やってるけれど。国土調査。国調入るときちっとなるんですけど」

鈴木「国調ってなんですか」

結城「国土調査。山なんかは遅いのよ」

宮司「宅地、畑、田んぼ終わってたけど、山の方は全然手つかず。」

鈴木「まだ終わってないんですか。」

宮司「終わってない。だから大まかにわかるのは国有林と民有林の境まで。」

結城「だから個人個人でこの沢からあっちの沢まで俺のだとかという」

鈴木「ああ、ではお互いで、あんたのそこはここからここまで」

宮司「そうそう、あとは柵で囲ったのよ、絵図面なんかはあるのよ。」

鈴木「いまだにそうなんですか」

結城「国調入らないところは。結構あるのよ。」

宮司「国土調査って言って今年もやってるんだけど。今やってるのは、

ここ、ずっときて、

此の山のこの辺、絵図面では誰のものとなってるとは、これを調査して測って。」

鈴木「大明神の辺りも国調入ってない」

宮司「入ってない。この中で、うちんこはここ、隣はここ。」

結城「絵図面の面積と国調の調査でかなり違ってくることもある。」

佐藤「子供に相続させるときも大変ですね。」

鈴木「村山を居合神社というようになったのは、新しいんですか。熊野神社でなくて居合神社というようになったのは。」

宮司「うん、釜ヶ沢大明神が居合神社奥の院となったのが、だから四十一年。」

鈴木「居合神社は、昔は「居合」がつかない熊野神社だったんですか」

宮司「熊野神社でした。」

鈴木「その前は居合神社といってたんですか。」

宮司「言ってたなかった。つまり熊野神社で修行したってことわかってたから、江戸時代の人は要するに林崎さんが修行したってことできてたんだ。居合神社って言ってなかったんだ。」

鈴木「ずっと昔から居合神社って言ってたんだと思ってた。」

佐々木「山形県のホームページに書いてましたね、そんなこと。分納っていうんですか、神様をタテマツルことになったから、居合神社と熊野神社と呼び名をつけたと」

宮司「村山の居合神社の脇に沿革書いてるけど、あれにはどう書いてるんだらう。」

筆者註

「林崎神社と林崎甚助重信」（居合振武館発行）による解説を要約すると次の通り。

林崎居合神社はもともと熊野明神であったが、林崎村にあったことから林崎明神と呼ばれていた。この時点では、林崎甚助重信公の林崎とは無縁である。村名の林崎が名前の由来である。

その後林崎甚助重信公が、この仇討に際して林崎明神に参籠したと伝えらる。林崎流伝書では「林明神」とあり、その頃は林の中にこの明神があつたからであろうとのことである。明治七年熊野神社に居合神社を合祀して、明治十年明治政府公認以来「熊野居合両神社」である。

延享五年（一七四八年）林崎明神に奉納の句集に「往昔林崎大明神は石城嶽といえる高山の岩倉よりこの世に鎮座まし」とある。株倉山の北麓の溪流を細野では釜が沢と呼んでいるが、林崎村では古来大明神沢と称している。だから細野株倉山の岩穴を林崎明神の奥の院というのはうなづけることである。とにかく石城嶽の大明神沢近くの岩穴に熊野大明神が祀られたのが林崎大明神の草創であり、その後山岳仏教が鎌倉幕府の建長二年（一二五十年）禁令により衰微した影響か、荒宿に移り、更に林崎に遷座してから林崎大明神と言われ、林崎甚助重信公の祈願するところとなり、以来武神と諸般の武士から尊崇され明治に入り村社熊野神社となり、熊野居合神社となった。

鈴木「そうすると、江戸時代には居合神社とはいつてなかったわけですね。」

宮司「言っていないと思う。」

鈴木「熊野神社だけど、その熊野神社で林崎甚助公が居合編み出したってことしてるから、熊野神社に参詣するってことで仙台あたりの藩士なんかも来てたってことですね。それで河野先生は居合神社の奥の宮といわず熊野神社の奥の宮はどこかと尋ねられたわけですね。」

宮司「だから、また話戻すけど、あの三人。五十嵐吉雄さん、ちようど、居合神社の先行くと、細野村終わって奥の院にはいつていく反対側、あそこ五十嵐吉雄さんの土地だったのよ。あそこに道場建てようっていう話もあつたのよ。ね。そしたら剣士の人たちがそこに寝泊まりしながら、修行出来るんでないかって夢見たのよ。で、ところがいざやろうと思つて、したら、電気はどうする。トイレはどうする。ガス水道はどうするで、なかなか計画倒れみたくなっちゃったんだけど。そういう笑い話、そういうの黙って聞いてて。だから、大々的にはしなくても、今のままで、やつとこ、この村の人たちも協力してくれるようになったから、だから、皆さんが来る来ないにかかわらず、大体七月の半ばころから、二回くらい、刈り払い、みんなに呼びかけるとね、十人くらいいつでも集まってくれますんで、刈り払いしながら、で、やっぱり雪が多いとね、木が倒れてきたりして、だから、チェーンソー持つて行って。あそこ意外と山菜がないんですよ。出無いの。だから山菜採りとかきのこ採りとか入らないの、人が。だから、逆に却つていいのかなあつて。あれがやたら人が入つて、どこへ行つてもきのこだらけだ、山菜が豊富でなんでもとれるなんていつたら、どんどんもう入られて、みんな。それよりも、逆に雪解け見ながら、ああこも崩

れてきた、この木も倒れてきた、じゃこれ切って、ほれなんだ
つつつて、ボランティアでやって、奥の院までいってお参りし
て帰ってくるっていうか。あれがやっぱりいいのになって、逆
にね、あんまりわあわあわあみんなでいくよりも。」

鈴木「あんまりみんなで行ったら、だんだん狭くなってますからね、ど
んどん、一気に崩れちゃう可能性ありますけど。」

宮司「それでね、なんかもう少し広く足場したいなあって思うんだ
けど。」

以上でございます。こうして奥の宮発見の経緯を伺ってみると、もし
河野先生が安達石匠や工藤大工さんに奥の宮の場所の特定調査を頼まな
ければ、或いは、もし安達石匠たちが細野の田中さん、鈴木さん、五十
嵐さんたちに合わなければ、奥の宮は今でもあの山中に眠ったままだっ
たかもしれません。河野先生がよくおっしゃられる「目にみえないもの
の働き」か奥の宮を発見させたのではないかと思います。

平成二十五年十月二十七日(日)取材、場所 鈴木忠宮司様自宅

参加者「鈴木忠宮司。河野百錬・伝承会より佐藤一彦、鈴木伸昌、

結城進、佐々木理恵」

編集後記

我々居合人は、単純に林崎居合神社と呼んでいますが、林崎甚助公
が修行の時代に林崎にあったのは熊野神社で、地名の林崎から林崎大

明神とも呼ばれていました。その林崎大明神の奥の宮が細野の釜ヶ澤
大明神。居合神社はその林崎甚助公を江戸時代に祀った神社でありま
すから、釜ヶ澤大明神が居合神社の奥の宮というのは、熊野神社と居
合神社を一緒くたに混同していることになります。

熊野神社の地に居合神社が出来て、明治になって、その二つ合わせ
て一社ということで、熊野居合両神社という名称で神社庁に登録され
たのであります。

しかし、筆者とて、当の林崎居合神社という名称が、後年作られた
俗称で、正式名称は、熊野居合両神社であるということも、「林崎明神
と林崎甚助重信」という書籍をよむまで、全く存じませんでした。

ちなみにこの書籍は現在でも山形県村山市役所で頒布しております。
一冊三千元(送料別)です。一読をお勧めします。(村山市のホームペー
ジに詳細が掲載されております。)

誠に僭越ながら

河野先生の「再版 大日本居合道図譜」の二二七頁に、山形県楯岡
の安達恒雄(石工)様の「御神号霊石奉安」という一文があります。

その副題は「林崎居合神社の奥の宮」ですが、これまで述べてきた
ように、「居合神社」の奥の宮という記述は間違っていることになりま
す。

もっともこの文章を拝読いたしますと、文中には「大明神奥宮の地
細野」と、正しく書かれておりますので、安達様は正しい認識はお持
ちだったことがわかります。

副題の「林崎居合神社の奥宮」という書き方は、読む人の判り易さ
のためのものであったと拝察いたしております。